

---

# パパン、私は幸せです

秋月 実

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

パパン、私は幸せです

### 【Nコード】

N6286Y

### 【作者名】

秋月 実

### 【あらすじ】

拝啓、天国のパパン。

私は今日も幸せです。それもこれも全て、パパンが私の記憶と人格と頭脳の価値を認めてくれたお陰です。チートとは縁がないし、貧しいけれど平和な毎日を、日々妄想を楽しみながらその日暮らししています。男に産まれた当初は戸惑いましたが、それも最近ではすっかり慣れました。繰り返しますが、私は幸せです。

え、何降りてきてんの。チートいらないうって言ったでしょ。私はこれでいいの！ 結婚！？ ハーレム！？ ふざけんなああああ！

!

プロローグ 前編 チートなんていらないうつ

気がつくと、真っ白な所に立っていた。

大勢人が集まっている。ちょうどその中心ほどに私はいた。

声が、聞こえてくる。

そちらを向くと、天使様が羽ばたいていた。集団の右のほうには様々な服装をした天使や悪魔、エルフたんや獣人、ドワーフっぽい人が並んでいる。

「ええと、皆さんこんにち。貴方達は、私共の子供となること、つまりこの世界に転生する事になりました。より多くの子供達が幸せになれるよう、この世界では皆さんに転生の際の希望を聞いています。よく注意して聞いてくださいねー」

ええええええ！！　転生！？　すごい！　ありえない！　そっ  
か、私、死んだんだ。そういえば、最近だるかった気がする。そっ  
かぁー。ああ、でも死んじゃったのか……。

まあ。チート転生できるんだからいいよね

「まず、皆さんに紙を配ります。上から順に、次の生での第一希望の望み、第二希望の望み、第三希望の望みを書く事ができます。頭の中で第一希望は可愛くなりたいーとか、第二希望は頭が良くなりたいーって考えればそれで紙に文字が浮かんできます。では、注点を述べていきます」

私の手に紙が握られる。真っ白な紙に、私の名前が書かれていた。

「いいですかー。まず、願いは第一希望から順に叶えられていきます。次に、同じ事書いても、第二希望の方が遥かに強いです。例

えば、一般的な人が剣の技能を望み、努力したとします。すると、第一希望に書けば一流、第二希望に書けば少し上手い程度、第三希望に書けば普通の腕前が保証されます。こういう人になりたいというだけでなく、例えば、美しくなくてもいいやとか、貴族や王族にするぐらいだったら他の才能や健康が欲しいという人は、貴族や王族は除くと書くと、地位よりも才能に恵まれやすくなります」

第一希望ぶつちぎりで凄いな。魔法使いたい。

「転生の手順ですが、まず前世での行いをポイント化し、基礎値プラスランダムでポイントを追加します。ここから、願いをその人の向き不向きなどを加味して叶え、願いの分のポイントを引いて、あるいは足して行きます。残ったポイントを0になるまで生まれや才能、美しさや健康に振り分けて生まれてもらいます。また、それぞれに課せられた課題を達成すればご褒美がもらえますよ」

なるほど。

「紙を持って右の人達の所に行くと、一度だけアドバイスが貰えます。叶えられない願いがあればその時教えてもらえますが、二回目には叶えられない願いがあってもそのまま受理されます。貰えるアドバイスは、専門分野によって変わってきますが、みなさんの幸せを願うことに関しては変わらなないので安心して下さい。最終提出を行った担当者が来世の貴方の担当者、すなわち親となります。それと、転生すればここでの記憶は忘れてしまうので、相談を恥ずかしながらする必要はないですよ。最後に、左方向にいけばこの世界についての資料が見ることができるので、初めてこの世界に生まれる人は見ておくのもいいでしょう。これで説明は終わりです。親として、貴方達の幸せを心から祈ります」

ぺこりと天使が頭を下げ、大多数の人々ががやがやと喋りながら並んでいった。

私はそれについていき、様子を見る。人のアドバイスというのを聞いてみたい。

天使はやはり人気だった。私はそちらにより、おじいさんと天使が話しているのを聞いてみる。

「第一希望の研究を完成させる、という願いは不許可です。なぜなら、それは才能ではなく、その人の行動になるからです。記憶を保持する、もしくはそれを可能とするほどの頭脳を授けることは可能です。でも、この研究は素晴らしいものです。その知識の保持となると、かなりのポイントを消費します。例えば、魔力もそれを理解する知能もない農民に生まれてしまえば、研究も無用の長物となってしまう。そもそも、それは貴方の記憶を持っても、別人なのです。貴方は大変高いポイントを持っていますが、記憶と環境と頭脳の三点をクリアするのは不可能です。それをどうするかよく考えて、もう一度持ってきてください。ただ、貴方の魂は学者として適正があるので、頭を良くする願いは比較的叶えやすく、生まれ変わってもその道を選びやすい傾向を持っていますよ」

「どうするか……」

おお、かなり細かく見てもらえるんだ。凄い。

「王様と正妃の子、美形、そして長男ですか……その場合それだけでほとんど全てのポイントを使いますが」

「うるせえ、言う事を聞け！」

ええ……。それってありなの？

この世界の王侯貴族はきつとろくなもんじゃねえな。

生まれがいいほど、消費ポイントが高いわけだし。

それから、しばらく聞いて回った後に、考えを纏めながら左へと向かった。

前世の記憶、それも価値ある記憶は高いらしい。それに、頭の良さもセットで貰わないと意味が無いようだ。人格も必要、と。

私は、考える。

記憶、人格、頭脳。

現状維持だけで終わるじゃん。

そして、考える。

私の記憶と人格と頭脳はいかほどのものだろうか？

いや、願いを変えるつもりはないんだけどさ。

資料をパラパラとめくる。

いろんな種族があるんだ。

へー、魔物もいるのか。

文明はあまり進んでないなー。

魔法がある。

大雑把に書いてあるそれをじっくりと読み、ぱたんと閉じた。

とても素敵だと思う。具体的に言うと、私が嵌っていたバーチャ

ルリアリティゲーム、MMOと同じくらい素敵な世界だ。

ただ、ネットがないんだよね……。本もあんまりなさそう。何それ地獄？

しばし考える。

まず、内政チートは出来るだろう。少なくとも領主として大成できるはずだ。

となると、その知識の価値はいかほどか。

きつとものすごく高いに違いない。

次に、性格。これも高額だろう。凄く人格者だとは言わないが、まあまあいい性格だと思うし、犯罪者というわけではないし。

さらに、頭。これは記憶と表裏一体だが、この素晴らしすぎる頭

脳は高かるう。

現代人の中ではそりゃ悪いほうだが、行くのは中世ファンタジーですよ？

これは貧しい生まれ確定か……。

どころか、もしかして不可と言われるかもしれない。

高いポイント持つてるじー様がダメだしされてたもんな……。

中世レベルの発明でダメ出しされるんだから、そうとう記憶は高いに違いない。

私は重い足取りで、イケメンで空いてるという理由で悪魔の……いや、悪魔様の方へと向かった。

「すみません、お願いします」

「ん、担当官のルヴァキルだ。二回目も持ってきたら、俺がお前の父って事だな。じゃあ、見せてみる」

パパンはそれに目を滑らせ、整った顔を顰めた。

「……んー……これは……ずいぶん思い切ったな。どうしたもんか……」

「え、と。生まれは悪くて構いません。醜くてもいいです。男でもいいです！　お願いしますパパン！」

「そりゃ無理だ」

パパンの拒絶に、私は絶望する。

「そんな！」

「つーか、そんなに大量にポイント稼いで何がしたいんだ？ 剣士にでもなりたいのか？ これだけポイントがあつたら、確かに世界一の剣士になれるが……。多分第一希望に剣士って書いたほうが早いぞ。第一希望に剣士とだけ書いておけば、俺がいいようにしてやる」

「どこから剣士が。嫌ですそんなの。え、っていかもしかして私ってポイント高い？ 前世の行いとかランダムとか相当いい結果が？」

「前世問題外、魂高め、ランダム普通だな。結果普通より少し下かだからって何も記憶を引き継いでまでポイント稼ごうとする必要はないぜ。完全に俺に任せるなら、そこそこ幸せな約束を確約できると思う」

「前世問題外ってひどいよ！ 親切に辻ヒールしたじゃない！ 良い事いっぱいしたのに！」

「それは善行じゃねえ」

「えー。でも、いろいろ我慢すれば記憶と人格と頭の良さはそのままにして貰えるんですね？」

「ん？ ちょっと待て。何か勘違いしてないか？」

「パパンは信じがたい表情で、私を見る。」

「えっと。お前の記憶、人格、頭脳。全部ぶつちぎりでマイナス要素なの理解してる？」

「そんな馬鹿な」

パパンは難しい顔で書類をめくった。

「まず、記憶。小学校の頃から漫画、ゲーム、アニメ、ネットに入り浸り、高校時代にバーチャルリアリティゲームが開発されてから、引きこもってそれで遊び続ける。役立つ知識はなし」

「なんで！ VRMMOで鍛冶屋も裁縫も錬金術も医療も武術も極めまくった凄まじい宝庫じゃない！」

「あのな。ごっこ遊びと本物は違うんだ。ゲームでできたから現実でも出来るとかないから。どれも現実では通用しない。それに、恵まれた生活を知っていると辛いぞ。例えばこの世界にはネットも漫画も存在しない。言葉だって、大人が覚えるのと赤子が覚えるのじやわけがちがう。そんなわけでかなりのマイナス」

「えええええ！？」

「次、人格。二次元にのみ欲情し、腐女子。働いたら負けだと思ってる。コミュニケーション障害。この性格で生きて行けるほどこの世界は甘くない。かなりのマイナス」

「人格否定！？」

「頭。こっちの七才程度の知能で固定とかとんでもない。生きていくのも難しいだろうな。これだと魔術の行使も無理。当然マイナス」

「うげらっ！」

私は打ちのめされて机に突つ伏す。

「悪い事は言わない。この3つの願いは全て取り消せ。俺達は、子供達に幸せになってほしいと思ってる。その為には、この3つは邪魔なんだ。お前は一度死に、新しい赤子が産まれる。その子に、出来る限りの幸せを与えたいと思わないか？」

「記憶のない来世なんて他人じゃん！ どうでもいいYO！ お願い、パパン！ ポイントが何に付きいくつなのか知らないけど、3つの願い全部で三十ポイントぐらいに換算してよ！ マイナスとか酷いよ！」

「おまけにおまけしてマイナス三万ポイントだな。これ以上無理」

「マイナスすごっ！？ そこをなんとか！ ポイント増やせって言ってるんじゃないんだしさあ！ 三ポイントでもいいから！」

「うーん、マイナス一万五千までなら、なんとか」

「プラス以外認めないYO！ くそ意地でも今のままの頭脳で生まれてやる！」

パパンはため息を付く。

「いいか、俺達にはお前に努力次第で幸せになるチャンスを与える義務がある。なにより幸せになってほしい。これだけ大きなマイナス、どこかで挽回しないと幸せになてなれっこないだろ？ 最低でも一万五千点分のテコ入れは必要だ」

「十分幸せになれるYO！ 幸せって誰の基準！？」

「俺の基準。学んで働いて子供作って育てる幸せ以外認めない！  
したがって豪商の家で食っちゃ寝系のポイントの割り振り方も認め  
ない！ ニートの幸せなんぞゴミ箱に捨ててしまえ！ 俺が人に誇  
れる人間になれ！」

「地獄やアアアアアア！」

その後も土下座して願いの受理と三ポイント認定を願っていると、  
他の人は全て転生し、私だけになっていた。

なんだなんだと担当官が寄ってくる。

うう、晒し者のヨカーン。

## プロローグ 後編 納得の駄目さ

「まあ、ルヴァキル。だめよ、頭ごなしの否定は。私にいいアイデアがあるわ。まず、記憶、人格はそのままにしましょう。頭の良さもそのままに。三ポイントで換算すると、性別を男にすれば、生まれを少し貧しく、外見を並に、健康な子供として生まれられるわ」

天使がおつとりと紙を見て告げる。

「しかし！」

「けれど」

天使は一本指を立てる。

「貴方には、貴方の前世を正当な評価した分の高い魔力と隠蔽能力を授けます。これを使うも使わないも貴方の自由。……という事でどうかしら」

「あ、ありがとうございます！」

「待ちなさい。いくら殺人鬼ではないとはいえ、能力のない子に高い魔力を預けて野放しにするということですか？ それはあんまりです。王の座程度ならいくらでも革命できますが、魔力の場合は暴走した時、止められる者がいなくなってしまうです」

即エルフがダメ出し。つーか、王の座あっさり許可したのってそんな意図があったのね。怖いわー！

「何か他に意図して選択できる力を渡せば良からう。そうすれば、世界ぶつちぎりで一位の魔力も一流程度に調節できる」

そんなに私の前世、マイナス酷いんか！？ 私悪いことしてないじゃん！ あ、ごめんなさい、PK（ゲーム内で他プレイヤーのキアラを攻撃）したことはあります。

「その場合目標も、二種類決めないと駄目だな。前者なら働け、後者なら人の役に立て、かな……」

「両方共、少し難しすぎるのではないでしょうか」

酷い言われようです。

「私働いてたもん！ VRMMO内で一所懸命冒険者やったもん！」

その訴えはスルーされた。ひ、ひどい。酷過ぎる！

「よろしい。久々に全員でじっくり話しあいましょう。ミネルバ様にも許可を取らねば」

「大会議か。勇者が普通の家庭に生まれたいと言った日以来だな……。しかし、それも仕方あるまい」

何か大事キター。

「わ、私、ちょっとお前の前世に価値はあるって認めて欲しいだけなのに……」

丸くなつて泣き出した私に、優しく担当官達は微笑む。

「私たちは、皆、貴方の幸せを望んでいます。大丈夫、ルヴァキルを……貴方のパパンを信じなさい」

「ああ、必ずまっとうな人間にしてやる」

パパンが言う。うう、まったくもって必要無いです……。そして、私の体は透けていった。

結果発表――！ ドンドンパフパフ。

まず、私の名はルグナ。立派な男の子である。健康だけど、力がさほど強いわけではない。その代わり器用である。加護付きなので器用さは割と凄い。

ちよつと小柄。顔は並。

次に、私の家庭。

私のママン、フィアは未婚であり、貴族にはほんくらが多い。以上。ちなみに援助はなく、女手一つで私を育てた。

加護について説明しよう。

ママンは私がお手伝いをした事がなくとも、勉強をせずとも、愛情を注いで決して何も言わなかった。7歳の頃。そんな母が病気に

なった。よろめきながらも、いつものようにご飯を作ってくれようとするママン。だらだら寝っ転がっていた私は、なにか凄く悪い事をしたような気になって、食事を作るのを手伝った。

母は泣いて喜んでくれた。

パパンも泣いて喜んでくれた。天界からわざわざ夢の中まで出張してくるほど喜んでくれて、とても立派な加護……器用さをくれた。目標、働くをクリアしたことによるご褒美だ。

あんまり喜ばれるんで、私は逆ギレした。

「バカにすんな！ 私だって手伝いの一つや二つ出来るわ！」

それ以来、たまに母を手伝っている。何か騙された気がしないでもない。面倒な洗い物中は特にそう思う。

いや、たぶん絶対騙されてる。

なんで私、洗い物なんてしてるんだろう。

おのれパパン。我が父ながら、恐ろしい男。

そんな事を思いながら、洗い物を拭いて運ぶ。ママンはニコニコしながらそれを眺める。もちろん、手はせつせと内職をしている。

さて、次に私には存在しない能力である。

存在しないつたらしいのである。

其の一。魔力隠蔽能力。

其の二。超一流クラスの魔力。

其の参。パパン召喚（5回まで）

其の四。脳内パソコン。（魔力の簡単な基礎制御ソフトと剣士ソフト、基礎魔術リスト付き。基礎制御は抑える方向で常時発動。他に診断ソフト、植物辞典なども）

其の伍。亜空間物入れ。

其の六。お告げ（神様名義で私の保護を申請してもらえらしい）  
其の七。パパンアドバイス（無制限）

……。貰いすぎじゃね？ 魔力隠蔽能力はいいよ？ けど、「超」一流クラスの魔力って何？ パパン召喚って超すごいことじゃね？ パパン悪魔の格好しているけど、その実態は神様だよな？ 脳内パソコン、ええ、魔力を操るには必要だと思います。基礎制御も、暴走を防ぐには必要です。ありがとうございます。でもさ。

剣士ソフトとか、基礎魔術リストとか、診断ソフト、植物辞典はやりすぎじゃね？

確認しかしてないけど、剣士兼魔術師兼医者にすぐ慣れるってありえなくね？

「亜空間物入れ？ それってかなり高度な魔術じゃなかった？  
 つーか神様名義で私の保護を命じられるってどういう事！？

パパンのアドバイスいらない！！

ねーよ！

そこまでしないと幸せになれない私の前世って何！？

どこまで人を見下せば気がすむんだよ！

「つーか、パパン達は何を望んでいるの!? 馬鹿に刃物をもたせるなって遠まわしに言ってたじゃない! 十分すぎる人間兵器ですが、なにか! ?」

くっそ、自分のプライドがかかってなければ俺TUEEEESH  
てやるのに！

ぜってー使ってやらねー！

私の前世を私が認めなくて、誰が認めるっていうんだ。

ママンが病気の時とか、超使いたくなるのがまた悔しい。

元から無いはずのものを使わないだけなのに、私が悪者みたいじゃない！

こんな能力、無ければ良かった。最悪だ！

プリプリしつつも、実はチート能力、使ってしまったんだよね。

其の七、パパンのアドバイス。

呼んでないのに来るの。来るの！ お祝いごとや誕生日やお正月

など、しょっちゅう来るの！

チート使うことになるからパパン来んなよ！　って言ってるんだけど全く聞き届けてくれる様子がない。

パパンに励まされ、叱られている事が物凄く嬉しいことが、またチートを活用しているみたいで腹が立つ。

……実は、言葉を碌に覚えられなくて、同年代の子供にバカにされてばっかで、それもあつて友達とか全然作る気にならなくて、でもたまに寂しくて、ネットとか出来ないのが辛くて、そんな時に物凄く助けになってくれたりする。

ああもう、信じられない！

私、幸せになるから。

今の記憶と人格と知恵で、絶対幸せになるから！

くそう、ゲームのアイテムの名前と効果ならするする記憶できるのに、日常の単語は全然覚えられないんだよなあ。ちよつとお母さんの内職手伝いながら、しりとりでお勉強でもするか……。

……私がお勉強なんて。最悪だ……。

一話 結婚しても子作りの予定はないですよ

えいやああああ！ とおおおおお！！

私は布に気合を入れて針をぶっさす。

私の最近の日課は刺繍をして売っ払うことである。

ふふふ、絵心はあるんだ、絵心は。

私、生活していけるんじゃない？ ただ問題は刺繍で生活している男を見た事がないということなんだけど。私が新しい道を開拓してやるぜええええ！

そんなある日の事である。

一組の父子が隣の家にやってきた。

ローブに仮面姿の糞怪しい女の子と、人の良さそうなお父さん。なんでも、醜いからローブと仮面で隠してる的なうんたらかんたら。

そして、仮面にロマンを感じるのがこの私である。

ママンに隠れ、じっと観察する。

しかし、コヤツ残念だ。ローブが白の無地というのが行けない。私だったら、かなり怪しい刺繍を施して悪の人物っぽくしてやるのに。

系代たくさん掛かるからしないけど。

ちなみにこの女の子、帯剣してます。それもあって怪しさ天元突破。

「あの。僕はリーファです。13歳です。よろしく」

「私はルグナ。8歳よ。よろしく。剣使うの？」

「嗜み程度です。ルグナは？」

「私は刺繍が出来るわ」

そして、しばし私は考える。

この私の素晴らしい過去を活用するなら、剣を習う事は必須じゃね？

剣の扱いなら自信あるYO！ なにせ（ゲームの中で）凄腕冒険者だったからね。

「剣、教えてくれる？ 代わりに刺繍を教えてもいいよ！」

「いいんですか？ ありがとうございます」

微笑ましく笑う両親に見送られ、果物をもたせられて、私達は部屋を出た。

私は取って置き場所……ちょっと人に見つかりづらい小さな広場に案内する。

ここは木々で覆われており、しかも町の中の緑なので危険はない。私とリーファは木の棒を構え、対峙した。

まず、私が動く。ていやああああ！

な、何！？ VRMMOの時と体の使い勝手が違う！？

ジャンプ力が全くでない！？

棒の遠心力が！？

システム補正がない！？

結論から言おう。

あっという間に叩きのめされた。

おのれええええ。VRMMO内なら負けないのに！

リーファはじつと私を見る。

「……ルグナ。君、前世の記憶って信じる？」

「あ、貴方も記憶持ち？」

サラっと言うと、リーファはこくりと頷いた。

「そっかー。えと、私と同じ異世界人？」

「異世界人なの？ あれは向こうの剣術？ おかしいと思ったんだ。物凄く変な癖がついてるから。まるで、棒の重ささえ重すぎるみたいな、身体能力が低すぎるみたい……」

あ、やべ。私は笑って誤魔化した。

その後、私達は果物を持って二人並んで話をしていた。

「君も、一般人になりたくて？」

「え、えと、リーファは？」

私達は二人、笑って誤魔化した。

「えと、担当官を聞いてもいいかな」

「私のパパンはルヴァキル様」

「……僕もだ。悪魔と取引してでも、一般人になりたいと思ったから。君も？」

「私はパパンが空いててイケメンだから。そういやパパンの担当私だけだわ」

一瞬の間。そしてリーファは笑った。

「僕の時もそうだよ。そっか。パパンか。いいな。ね、君は秘密を守れる？」

「友達いないから話す人いないよ。私もバラされたくないし」

「じゃ、自己紹介で前世と願いや今回のポイントの事、一緒に言わない？ 僕も秘密にするよ」

「んー。いいか。いいよ」

私達はせーのと言う。

「元勇者、男。願いは一般人として人生をやり直したい。綺麗に生まれたい。女の子として生まれたい。ポイントが多すぎて、完全な一般人には慣れなかったから、今世では力を隠してる。ここへは、貴族に手籠めにされそうになって逃げてきた」

「えっと、こっちで言うところこ遊びの天才、かな。元女。願いは記憶、人格、頭脳の保存。お前の人生マイナス三万ポイントって言われたから、ふざけんな私の人生は三ポイントだあって前世セツト三ポイント計算で産まれた。健康を得るにはちよっとポイント足りなかったから男になったの。ただ、マイナス三万ポイント計算の能力も持つてる。私の人生の価値が掛かってるから、使う気はないけどね。ただ、パパンと話せる能力があって、それはいつも使ってる。向こうが勝手に夢に尋ねてくるのよ」

私達は沈黙した。

その後、リーファが爆笑する。

「マ、マイナス三万ポイントってどんな前世だったの！？　すごい力を持たせられるって事は悪人じゃないんだろうけど。あはは、ぼ、僕より多いよ！　くくっあ、ごめ、でもルヴァキル様、いや、パパンと話せるなんて凄いな」

「勇者よりポイントが高いとはこれいかに。ちなみに私のチートは7つまであるぞ！　しかし、オカマ勇者かー。親近感湧いてきたわー。男と恋愛とかした？　でも貴族からどうして逃げたん？　一般人で女の子で美人だと、手籠めとか人身売買ルートしか無いじゃん。玉の輿だからいいんじゃない？　不細工だった？」

「オ、オカマじゃないよ！　ただ、姫さまみたいに愛されて、守られるのが羨ましくて……ちやほやされてみたくて……。でも、実際に生まれ変わって見たら、女の子ってすごく大変なんだ。剣を振っている方が性に合ってるし、いざ口説かれたら怖くて気持ち悪くて……」

「私も女を抱く気はないなあ。育って性欲出てきたらどうなるかわからんけど。それに私、男は絵が一番好きだなあ。格好いい人いたらそりゃときめくけど。セックスはいらんわー。ね、いつか困ったら偽装結婚しない？　大人になっても相手がいないと体裁悪いじゃない。子供できなくても養子引き取ればまあ周囲の目は和らぐし。私貧乏だから、嫌かな？」

「助かるよ！」

「ちなみにレズ？」

「じ、実は僕、女の子って少し苦手なんだ。守らないといけないし、相手が大変だし……」

私とリーファは微笑み合う。

「でも、それだと僕も稼がなきゃね。冒険者は意味がないしなあ」

「でも好きなんですよ？ 戦いが。気にせず好きな事すればいいと思うよ。隠れて魔物退治してもいいわけだし。リーファは特に縛りはないんでしょう？ 主にチートを使うと前世の価値が全否定されるとか」

「確かに、力を使うとまずいつてわけじゃないけど。気にせず、好きな事を、か」

「バレたら逃げればいいよ。独り立ちしたら親は関係ないし。旅とか好きだよ？ でも私にチート使わせようとしたら即効見捨てる」

「わかった」

それから、私とリーファはよく遊ぶようになった。

薬草辞典はいらんけど、リーファから色々教えてもらうのは全然オツケー！

でもおかしい。VRMMOでは一目で見分けついたのに、現実の草は見分けつかんとか絶対におかしい。

世の中はきつと不条理で出来ている。

ちなみにリーファと会った日の夜、パパンが来た。

早く孫の顔が見たいと言っていた。偽装結婚だというに。

なんか、突然変異のチート持ちより親の素養を受け継ぐチートの方がポイント低く済むらしく、恐らく二人の子の枠は大人気になるだろうとの事。

あの、王様の長男にしろっていったおっさんがたくさん来るのか

……。

嫌だわー。怖いわー。絶対愛する自信がないわー。

子が親を選べるのに親の方が子を選べないというのは不公平すぎると思う。マジで。

素質目当てに生まれてくる子なんて絶対嫌じゃん。

私の子はもれなくチートオリ主転生になるのか……子作りなんて絶対しないわ。

リーファに気持ちを話すと、リーファも王様狙いのチンピラの話にドン引きしたらしく、納得してくれた。

パパンは泣いていた。

んなもん知らんよ。

あ、リーファはママンの事をママンと呼ぶようになった。

私もリーファのお父さんの事を父上と呼んでいる。

事実上の婚約である。ママンと父上は喜んでくれている。

こっちでは腕輪だが、リーファには元日本人として指輪も贈ってあげたい。

料理研究もしたいし、稼ごぞー。

……しかし、実際の料理って大変だね。物が溢れたり焦げたりするんだぜ？　ありえない。

ちなみにリーファの顔はあの後見せてもらった。馬鹿じゃね？

マジ馬鹿じゃね？　こんなんが歩いてたら、攫われて売られて犯されるに決まってるじゃん。それぐらいわかれ。リーファが今まで無事なのはきつとパパンの加護以外の何者でもないと思う。

前世もこの世界で生きてたならわかるでしょ。パパンも願った段階で教えてやれよ。なんでもたくさん与えれば幸せになれるってわけじゃねーんだよ。

そう指摘したら泣かれた。

何か私に指摘されたのがショックだったらしい。

パパンもリーファも酷過ぎる。

一話 結婚しても子作りの予定はないですよ（後書き）

注意書き：書きたい事は三分の二ほど書ききったのでこの後は何も決まってるじゃないです。勇者はこのまま良き友でいるかも知れないし、ヤンデレるかもしれないし、（チートバラす的な意味で）裏切るかもしれないし、他の人間に恋するかもしれません。

期待しちゃ駄目よ

## 二話 パパンのラブが重いです

「これをこうして……そうそう」

私とリーファは刺繍のお勉強をしていた。  
午前は刺繍、午後は剣技である。

「リーファは本当にルグナくんが好きだね」

「ルグナもリーファが好きなのよ。いつもリーファちゃんのお話ばかり」

両親が見守りながら、暖かく会話する。最近いい雰囲気である。

二人が結婚したら素敵なのに。主に経済的意味で。

ま、リーファンとこも夜逃げしたせいでお金ないけどね。

あ、リーファも外じゃ苛められ気味。当たり前ですよー。仮面じゃあ……。

最近は二人で小さな魔物も取ってくる。

あくまで子供が狩っても問題ない、小さな魔物である。

子供の手に余るはずの大物を狩った時はその場に捨てている。

最初の頃は大変だったけどね。だって……現実って血が出るんだぜ……？

素材つてのは、皮剥とかして得られるんだぜ……？

とにかく、私達は、互いに支えあって少しずつ成長している。

リーファは独り立ちが割りと目前だったりするけど、仮面したままで働ける所はあまりない。

「つか顔焼けば？」と言ったらパパンに超怒られた。

そういうわけで刺繍やなんかは大切なお仕事だ。

魔物の素材なんかを売った余剰金額で色々買い、最近ではリーファ

に着せる服を作っている。

目指せ悪の幹部っぽい服。

後、代筆業も始めました。

リーファに教えてもらって私が書いている。

現代日本出身の私としちゃ、代筆業っていずれは消えるでしょーってイメージがあるので、本業にはしないけどね。

旅もするんだし、出店で刺繍がいいかなあ。

一応、ママンには将来、リーファと結婚して見聞を深める旅にでるのもありだと思っていると告げている。

ママンは定職について欲しそうだった。

ファンタジーだと、旅人とか冒険者が主流だよね？ 意味分かんらん。

パパンの意見は却下ね。宮廷魔術師になってハーレム建設って親が言うことか。

ということとで回想している間に服が出来たのでリーファの所に持っていく。

「似合う、かな」

どこから見ても悪の幹部。超格好いい。制作に半年かけたかいがあった。

私は手を叩き、褒め称えまくった。

「素晴らしいＹＯ！ どうかどう見ても怪しいよ！」

「ほめられてるの、かな……？」

そう言いながらも、リーファは頬を染めて自らの姿を術で写し、眺めている。

鏡なんて高級なものはないです。

中二病心をくすぐる服を、リーファはなんだかんだで気に入ったようだった。

勢いに乗って二人でそのままギルドに出かけたら絡まりました。何か凄腕魔術師と勘違いされたっぽい。

「服を作ったから幼なじみの一般人に来てもらったんだYO！冒険者なんだからそこらへんの餓鬼と凄腕魔術師の区別を付けられるようになるがいいよ！主に身振りとかで」

リーファの後ろに隠れながら主張する。

「服を作ったって……お前が魔具を？」

「ほえ？」

そこに、魔術師らしき人がやって来て、歩み寄って私と服を交互に眺めた。かなり立派な服を着ている。

「坊やに魔力はないようだ。これは、祝福だね。たまに、神様に気に入られると祝福が与えられるんだ。珍しいデザインだから、神様が気に入ったのかもしれないね。譲ってはもらえないかな？」

「え……。えと、リーファ」

「僕はいいよ。着替えてくる」

「坊やは、服を作る職業につくつもりなのかな？祝福っていうのは神様に腕前を認められたという事。一度気に入られた人は、祝福持ちの道具を作りやすい。きっといい職人になるよ」

「あ、ありがとう」

その後、リーファはいつもの白いローブに着替えてきて、ローブを渡した。

うん、何か凄い心当たりがあるね

ちなみに結構な金額になったそれはリーファに渡した。

帰途に着くと、私は早々に眠った。

夢にはやはりパパンが現れた。

「パパン」

「なんだ？」

「祝福。したでしょ」

「し、してないぞ」

私はじとつとパパンを見る。

「他の神にしてもらったが」

「パパン！ 過保護もいい加減にしてYO！」

「正当な評価だ！」

「子供の作った安物の布と縫い目の荒い服のどこが正当な評価なんだYO」

「本当に、着たいって子がいたんだって！ 食べ物なり、物なり、コピーしたら祝福するのが決まりだし……」

「んー……。わかった」

「なあ、ルグナ。俺にも一つ作ってくれ」

「……まあ、いいけど。祝福は最低限にしてね？　で、希望は？」

「そうだな……」

これは確実にお金に変わるからと、ママンにお金を借りてちよつと良い生地と糸で作った。

これも半年ぐらいかけて縫ってリーファとギルドに売りに行く。完成した時点でパパンが持つて行っているから心配はいらない。あ、羽入れる穴は自分でつけてくださいって言った。こっちは羽のついた種族なんて無いからね。デザインだけ後から穴を入れることを考慮した作りになってる。

「パパン、喜んでた？」

リーファはクスクスと笑って聞く。

「喜んでた喜んでた。調子に乗って手料理も作れとか言ってた。祝福するって言ってたから借りたお金をママンに返した後は山分けしよう」

「いいのか？」

「いいよ。大人になったら夫婦になるんだし」

「ああ、うん……な、なんか照れるな」

そうして二人でギルドにつく。

「おねーさん。鑑定して。また祝福ついてるかもしれないし」

「あら、ルグナくん。そうそう祝福は……ついてるわね。すごく強力なのが。あらちよっと困ったわ。ギルド長呼ばなくちゃ」

なんですと？

結果、とんでもない金額になった。

そして魔具神殿からオファーが来るかもしれないと言われた。

阿呆じゃね？ パパン阿呆じゃね？

こんな大金持ってたら襲ってくれと言っているようなものなので、ギルドに預けてたまに必要な分だけ引き出すことにした。

ちなみに魔具神殿とは、様々な物を祭壇に捧げる簡単なお仕事をしている場所だ。

神様にとってのお店みたいな場所で、そこで気に入ったものがあればコピーを貰って祝福を授けるというものだ。

神様は子供からのプレゼント嬉しい、神殿も祝福嬉しい。

これぞウィンウインの関係。

でも祝福乱舞は禁止されているらしい。祝福乱舞は禁止されているらしい。

言いたい事はわかるね？ パパン。

結論から言おう。

珍しく一人で遊んでいたら誘拐された。魔具神殿への売買ルートキタコレ。

それとも閉じ込められて魔具生産かな？

どうせ祝福するのはパパンだけだろうし、祝福乱舞は禁止されているし、こりゃ用無し殺されフラグだな……。

それだけでなく、子供が祝福受けないと殺される、もしくは解雇されるって状況だからと祝福するのは禁止されている。超禁止されている。どれくらいかというと、物の良さの測定が行われるくらい。時には祝福を完全禁止もありうる。

でないと同じ状況が多発するからだ。神様はいつもより多くの子供達の幸せを考えている。

つまり、オワタ。

あーあ。

しかし私はVRMMOでの経験を生かした大逆転を執行するのであった。多分。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6286y/>

---

パパン、私は幸せです

2011年11月20日11時15分発行